

講座名	ステップアップ講座「植物の生存戦略・受粉（植物と虫の共生・共進化）」		
開催日時	2022年6月4日（土）10時5分～12時30分		
開催場所	印西市美瀬の谷津周辺	FIC参加者	17名

活動概要

FIC むしむしクラブとステップアップ講座とのコラボ研修観察会となった。北総線の印旛日本医大駅前に集合した。良い天気だった。まず講師の鈴木晴美さんから今回の観察会のテーマ「植物の生存戦略・



受粉」について次のような話があった。植物の「花」は「受粉」を行うための生殖器官と言える。風、水、鳥、虫などによって受粉が行われるが、中でも虫による受粉を選んだ「花」が最も多様な進化を遂げている。多くの花は餌として花粉や蜜を与えて虫を引き寄せ、虫は花粉を運ぶ送粉者となる。この関係を共生と呼び、この場合はお互い利益があるので「相利」と呼ばれる。特定の送粉者を選んでいる花もある。「送粉者」として選ばれた虫たちもまた多様である。「花」の形には意味があり、それは「送粉者」は誰かということに大きく関係している。とのことだった。

まず観察したのがツツジであった。ツツジの花弁内側の上方には蜜標と呼ばれる斑点があり、アゲハチョウが蜜標に沿ってストロー状の吸尿管を伸ばして行くと蜜にたどり着くようになっている。花粉には粘性があり、鱗粉のあるアゲハチョウの翅にも付く仕組みになっている。コブシの



花は花びらが上向きに広がっているのので、ハナムグリがドタッと到着できる。柱頭も雄しべもたくさんあり、花粉を食べる虫に花粉が付くように仕向けている。ウツギの花は下向きに咲くので、

甲虫よりも、チョウやハナバチ、ハナアブ向けの花と言える。ドクダミの花弁のように見える4枚の白い部分は総苞と呼ばれ、昆虫を誘い込む役割を担う。花は総苞の上にある黄色や白色の部分で、一つの花は3本の黄色の雄しべと1本の白い雌しべから成る。ただし



ドクダミは3倍体で単為生殖によって果実を作る。マムシグサは送粉者にワナを仕掛ける植物。匂いに釣られて、雄

花に入った虫は花粉まみれになり、仏炎苞の下部にある出口から出られる。しかし、再びままと匂いにだまされて雌花に入れば、マムシグサの受粉は成功するが、雌花には出口が無いのでその虫の命の保証は無い。アザミの仲間、虫が頭花に乗ると雄しべが下がり花粉を押し出す仕組みによって、虫に花粉を付ける。

また講師から次のような話もあった。

植物たちは環境の変化に応じて、進化している。クリは風媒花から虫媒花に変化した。最も進化した植物と言われているラン科は、花の形も送粉者との関係も高度に多様化している。シランは派手な蜜標でハナバチをおびき寄せるが、蜜も花粉も無い花。騙しのテクニックを使っている。とのこと。

講師から大変興味深い話をたくさん聴かせて頂き、また聴いた内容を実際の観察で確認できたので、非常に実のある実地研修だった。

FIC講師

鈴木 晴美

